浄青神奈川
前大本山光明寺御法主 藤吉慈海台下御染筆
神奈川浄青機関紙
第 20 号
発行日 1993年6月1日
発行人 北 邨 賢 雄

スタートの時を大切に

〝発想の転換と現実〟

教化団長 専福寺 住職
成 田 光 俊

浄青も本年は二十周年を迎えられますこと、お慶び申し上げます。その間、常々に教区、教化団事業等に率先してご協力いただき感謝しております。

教区の事業は、教化団を軸に、各種団体等の活動がなんらかの形で結集された時に花開くことが出来ると思います。そのためにも各種団体の活躍を切に望んでいます。特に若い力を秘め、未知のものにアタック出来る可能性を持つ浄青には、発想の転換による活動を期待するものです。

教化活動は〝何のための活動か〟を基本にし、その活動を〝如何に継続するか〟を考えてするものです。そのためには、事業方針を短期と中長期に分けて、計画を立案することも重要です。

いま浄青の活動として実践している帰敬会、歳末助け合い運動や金沢母子寮訪問なども有意義なことだと思います。その活動の目的、基本はどこにあるのでしょう。行事には、困難や苦悩はつきものです。時には失敗することもあるかも知れませんが、おそれることはないのです。大切なことは、基本理念を確立して、行動をすることです。

社会は高度な情報化が進み、価値感が多様化しています。青少年層の宗教離れの傾向があるともいわれてます。一方、新宗教、新々宗教のなかでは、その年令層が積極的で、活発化しているようです。何故、そのような現象が起るのかを考えることも大切です。

教化活動である以上、単なる道徳的行動でなく、たとえ通仏教的であったとしてもその根幹には、浄土宗の宗義があるような方策を考えてほしいものです。そして、先ばかり見るのでなく、しっかりと自分たちの足許をみつめることが大切です。自分たちで〝いま、なにが出来るか〟を考え、そのスタート台に立つことが第一だと思います。

茄子は夏から秋にかけて実をつけます。その盛りをすぎた頃、すべての枝を切り落し、根もとに肥料をほどこして置くと切った場所から、新らしい芽を出し、若々しい枝が生えて秋茄子ができます。夏のものとは異り、実は小粒で、種のない、味の良いものです。茄子の木は同じでも出来る実は違うのです。このような方法を、教化活動にも発想の転換として考えたら如何でしょう。

社会問題となっている、十数年後にピークを迎える高令者に対する〝高令化社会を支える青少年教化〟試行錯誤のなかでスタートした〝週休二日制に対しての宗教者の役割〟等今後の課題かと思います。青少年を対象としての教化をする上で、いま県内の青少年問題にたずさわっている方々が提起をしている〝自立と連帯〟についても耳を傾ける必要があります。青少年関係者からは、自立を示したものは少ないようですが、自立とは、人間が人間として精神的に、経済的に、社会的にひとりの人格として成熟することだと思います。自分自身が、このような観点に立って自立しているだろうかを問うことも大切であるとともに、自立するための条件は何か、を共に語り合うことも意義あることでしょう。

現代社会の中で、生きる規範としての宗教がないように思えてなりません。それらを教えるのも宗教者の義務だと思っています。

いま、どちらかというと平穏な生活を送っているがために、緊張感に欠けた日暮らしをしているのが現状ではないでしょうか。時によっては緊張感あふれる活動や生活も必要です。そこに新らたなエネルギーが自然にわきあがってきます。

何れにしても、足許には多くの課題があるように思えます。それらを選別するとともに、一歩一歩、理想のみに流されることなく、確実に進まれることを期待しております。

怠たらず 行かば
千里のはてを見ん
手の歩ゆみの よしおそくとも

青年こそ尖兵

神浄青会長　北邨賢雄

ある檀家に「今のお寺は、生きている人間のためにもうちょっと何かしたらいいんじゃないでしょうか」と言われたことがあった。これは、寺院が怠慢ではないか、という批判でもあり、また、彼の悩みを訴えたかったのかもしれない。そう思っている在家は多いはずだ。

法然上人の他力救済の仏教は最も民衆に近い仏教であると信じている。在家のための仏教である。何故なら、すべての人々をもれなく救うと言うからである。それならば、大衆の生活の中に生かさなければ、法然仏教は何も生かされてない。法然上人の仏教は殺され、法然上人の存在もまた殺されることになる。

いや、そんなことはない、生きているんだ、現に念仏の声は聞かれずとも、その念仏の精神は日本人の精神となって生きているじゃないか、という声もある。確かにそうかもしれない。

法璽自然と法然上人は仰った。念仏の教えもまた、法璽自然に弘まってきたのだろうか。一体、自然とは何か？（広辞林を引くと、作為のともなわないこと。人間の力ではどうすることもできない状態。ありのまま、とその他いろいろある）自然のままに、とはどういうことか。

同じ自然でも、自然破壊の問題は深刻だと思うが、一体人間のすることは自然ではないのかと、いつも疑問に思うことである。自然破壊をして金儲けをする人間と、それに反対する人間と、どちらも、自然の営みだと思うのだが、どうだろうか。常識人は前者を人工的と呼んでいるようだが。

そして人間はいつも、自分の身に降りかからない時は、行動しようとしないのである。だからしばしば、組織を作り、何々運動とあおって、寝ている者にも働きかけるのだ。会社組織も、何となく不自然のようでいて自然な人間の営みに違いない。

話しはまったく替って恐縮だが、囲碁戦略についてである。囲碁は陣地を取り合うものだが、けして無理やり囲って勝てるものではない。大きく囲おうとすれば必ず侵略されるのである。碁は攻防の中で自然と陣地を作るのがプロの極意であると言われている。（戦わずに勝つという場合もあるが、それは実力が離れている場合である）

無理をすると破綻が来るということも道理である。無理を承知でやらなければならない時もある。無理が通るということもある。碁の理論に従えば、戦うことこそ自然である。

神浄青創立二十周年を迎えて、あらためて全浄青のスローガンを噛みしめたい。

青年こそ願浄土の尖兵
青年こそ欣浄土の旗手
青年こそ顕浄土の主力

この力強い宣言こそ浄青の原動力ではないか。民衆の中に斬りかかって行くその勇気と、止めることのできないほとばしる情熱を尖兵というのだ。現状を打破する必要が無いと思えばしない。しかし、現状に飽きたらないと思った時は、現状を打破すべく行動にうつるべきだ。

去る二月に遷化された藤吉慈海台下は、やはりすばらしい情熱家であられたと思う。通夜念仏をお付き合いくださったのも、浄青に大きな期待を掛けてくださった現われだと思う。いま数々の台下のお言葉を振り返ると、激しく現状を打破するという気迫に打たれる。「念仏に勇みある人は無辺の悟りを得べき人なり、念仏にもの倦き人は無量の宝を失う人なり」そのお言葉のように、勇みある御前であられた。お浄土より神浄青にお導きあられますことを。

平成5年度 神浄青事業計画

4月17日　花まつり愛のプレゼント
金沢母子寮
4月17日　神浄青定期総会・光明寺
4月27日　藤吉台下本葬前清掃奉仕
4月28日　藤吉台下本葬儀手伝い
5月中旬　第1回理事会　光明寺
5月29日　念仏行脚　戸塚→光明寺
6月初旬　浄青神奈川第20号　発行
6月17日～18日　千葉成田
第21回関ブロ総会・研修会
7月初旬　光明寺開山忌前清掃奉仕
7月初旬　第2回理事会　光明寺
7月28日～30日　教区夏期僧堂手伝
8月25～26日　静岡第一ホテル
第23回全浄中央研修会
9月上旬　第3回理事会　光明寺
10月上旬　光明寺十夜前清掃奉仕
10月上旬　第4回理事会　光明寺
10月14日　十夜法要手伝・街頭伝導
10月下旬　群馬教区担当
第11回関ブロソフトボール大会
11月17日　横浜方面・役員担当
20周年記念ソフトボール・懇親会
12月中旬　第5会理事会　光明寺
1月25日　法然上人御忌別時念仏会
2月中旬　第19回全浄代表者研修会
2月下旬　他宗団見学・1泊理事会
3月下旬　第6回理事会　光明寺
4月上旬　神浄青定期総会花まつり

藤吉ご法主を追想して

小田原・春光院 住職
石川 邦雄

去る二月二十八日、大本山光明寺藤吉慈海大僧正が七十七歳でご遷化された。二カ月後の四月二十八日、光明寺に於て本葬儀が営まれ、地元神奈川はもとより全国及び海外からご縁を結ばれた大勢の人々が集まり、ご法主の仏者としての人格、行動、業績を偲びつつ、一山に響くお念仏の中をお浄土へとお見送り申し上げた。神奈川浄青会員も葬儀当日、事前清掃と、多数奉仕にあたった。

思えば九年前の昭和五十九年四月三十日、ご法主の晋山式が厳修された。当時小田原浄青会長であった私は、仲間の会員諸師と晋山式のお手伝いにかけつけた。

京都帝大哲学科を卒業され、更に海外にも学び、知恩院浄土宗学研究所主任や花園大学教授をつとめられるなど、哲学、宗学、仏教学と、広い視野で学を深め、恩師久松真一博士と共にFAS協会を設立「真の仏法興隆を！」と内外に向けて実践もして来られた方だと聞いていたが、晋山行列の中央を水冠と緋の衣姿で歩くお姿は、がっしりとした偉丈夫とお見受けしつつも、繊細さと柔和さを漂わせていられるのが印象的であった。晋山法要後の初のご垂示では、その後幾度も拝聴することになるご法語、『十二箇条問答』に出てくる「念仏に倦き人は無量の宝を失うべき人なり、念仏に勇みある人は無辺の悟りを開くべき人なり」という法然上人のお言葉を声高に紹介され、今こそ現代人に分かりやすくお念仏を説きひろめなくてはならない、と決意を込めて語られた。

その後のご法主としてのご活躍は光明寺開山良忠上人七百年遠忌諸事業、五重相伝の開催ほか、教区内の道俗のよく知るところである。

私にとって忘れ難い思い出は、ご法主就任直後の昭和五十九年六月三十日夕方から翌朝にかけて行なった小田原浄青主催の通夜念仏会である。教区浄青でもその後毎年御忌会に通夜念仏を行なうようになるのだが、そのきっかけとなったのがこの日の通夜念仏であった。主催の小田原浄青会員と教区浄青有志計二十四、五名が光明寺に参集。ご法主、執事長の講話に始まり、翌朝の勤行にいたるまで二万遍を越す木魚念仏と礼拝、詠唱をまじえた夜通しの別時会を行なったのだが、なんとご法主自らこの念仏行に加わられ、何度かお休み下さるよう申し上げたのだが、その度に「まだ大丈夫です」とおっしゃられ、とうとう朝まで一睡もせずに我々に範を示されたのであった。その折夜食に食べたカップヌードルにはいたく感激され（きっと驚かれたに違いない）、その後あちらこちらの講話で通夜念仏とカップヌードルについて何度か話題にされたそうだ。そんないきさつもあって、我々青年僧にとってご法主が身近かな存在に感じられるようになった。

当初健康そうにお見受けしていたご法主であったが、一、二年して持病の糖尿が悪化し、体力、視力が急激に衰えてこられた。しかし、そのような健康状態にもかかわらず、法務のかたわら執筆活動も精力的に続けられた。大学その他研究誌への論稿はもとより、雑誌等への随想的なものも数多く、中には我々青年僧にとって耳の痛い苦言、直言もあった。きっと「青年僧よ！無上心をおこせ」との思いが込められていたにちがいない。

その種の文章の一部をここに揚げ、現代における仏者の在り方を問いつづけられたご法主の在りし日をあらためて追想したい。

――（生活がよくなり）これがこの世の極楽だと思っている人が多くなると、酒池肉林の生活をしていても、そこから抜け出そうとはしないで、じっとそこにとどまっていたいと願っているのが人間のあさましさである。

したがって仏法などというものは、世の中に失敗した人とか、何か不幸にあった人の求めるもので、世に時めいている人とか小さな幸福感に満足している人には必要のないものと考えられている。したがって仏法を説くべき人も、無上心など持ち合わせていないので、現世の利益になるようなことばかり説いて、人間を本当に救ってくれるような深遠な教えは説いてはいないし、また説けもしない。寺院も教団も結局、現実的に美しい壮大な見せかけの建物を造ったりして、仏法の興隆、教団の拡大強化だと思っている。……僧俗ともに無上心を見失なってはいないだろうか――

仏教交流会研修）

20　5泊6日

平元正法

毎年二月に行っている他宗団研修も、今年は神浄青結成二十周年を記念し海外研修となりました。ハワイ研修以来五年ぶりの海外研修でした。

今回はマレーシアのペナン島を中心に、マレーシア仏教青年会との交流を通し仏教寺院の訪問と現地僧侶及び仏教青年信徒との合同法要をすることになりました。

参加者は、池田敬道上人、石川覚順上人、市川隆士上人、北邨賢雄上人、斎藤匡念上人、瀬高順教上人、田辺裕誠上人、玉木弁立上人、戸松秀明上人、古庄良源上人、三荒弘道上人、私の十二名でした。

期日は二月十五日より二十日までの五泊六日で、日本はまだ寒さ厳しい折ですが、常夏の国マレーシアは毎日三十度以上になりこの温度差にまいりました。

二月十五日は移動日でマラッカ泊、翌十六日香林寺にて早朝法要（これは日本の浄青のみ）を修し、併設の食堂で朝食をとりました。何と肉に見える物がみな精進料理と聞いてびっくりしました。鳥肉など本物以上のおいしさでした。その後突然予定外ですが、会議室でご住職（マレーシア仏教総会主席）釋金明師との交流会となりました。日本の僧侶はもっと政府に対して仏教行事のための休日をつくる運動をせよとのことでした。先述の朝食がおいしく、ついつい食べ過ぎたせいもあり、皆苦しげでした。市内見学後、ペナン島へ渡りました。

二月十七日、終日自由の翌日十八日は早朝よりマレーシア仏教青年会の方数名と共に各寺院（幼稚園見学、各仏教国寺院）を見学しました。特にスリランカ寺ではご住職より力強いお話しをいただきました。又極楽寺にて世界平和を祈願し、合同の法要を修しました。（表白は日本語）午後、日本人墓地での法要の後、青年会本部、事務所を見学しました。（ここでのドリアン……果物の王様……

の味は一生忘れないでしょう。）

この日の晩、今回の研修の一番のテーマである親睦交流会が開かれました。古庄師通訳のもと、北邨会長の英語のご挨拶を含め、両国青年会の協力とますますの発展を願っての声明がなされました。我々十二名に対し、約七十名の会員のあたたかい歓迎を受け、一時はどうなるかと心配されたこの会も、会話もはずみ、歌もとび出し、無事円満なうちに終了となりました。二時間程の宴でしたが大変有意義だったと思います。（尚、現在でもこの時知り合ったメンバーとの交流が一部続いているそうです。）

二月十九日シンガポールへ移動し、翌二十日帰国しました。皆かなりお疲れのようでした。

今回訪問したペナン島はマレーシアの中でも中国系の比率が高いところで、そのため仏教徒が多くいるようです。合同法要の際彼らの発音と我々の発音は違っていましたが、お経そのものは同じであり、また、戒名や位牌などもほぼ同じで、非常に親近感を覚えました。また彼らのほとんどが在家信徒ですが、大変熱心かつ勤勉でびっくりしました。交流会では英語と中国語が話せればもっとよかったと思いました。

マレーシア（他宗団

H5・2・15〜

最後にお世話いただきました添乗の末光さん、現地のプレイボーイガイドそして、ずっと一緒に同行されたマレーシア仏青全国理事の胡来金さんに感謝しますと共に又再び、この地を訪れることができたら良いと思います。

金沢母子寮訪問

林田　康順

「こんにちは。アー、去年も来たお坊さんだ！僕のこと覚えてる？」

「今日はどんな楽しいことしてくれるの？そうだ、あとで肩車してね！」

神浄青恒例の金沢母子寮訪問【花まつり愛のプレゼント会】が、四月十七日に行われた。午前十時、有志会員十名が光明寺に集まり、各組ごとに集められた浄財を三台の車に満載して、一路母子寮へと向かう。寮では先生方、お母様方、子ども達が温かく迎えてくれ、全員で長い階段を荷物運びである。すると、一年ぶりに会った子ども達から冒頭のような元気な言葉が聞えてくる。

花まつり会は、子ども代表による献灯・献花にはじまり、全員で月かげ、仏の子どもを合唱し、北邨会長から花まつりのお話をうかがった。その後、お釈伽さまの四門出遊ついての紙芝居や、座布団とりゲームなどのアトラクションで、時間がたつのを忘れ、みんな楽しく時を過ごした。午後三時、子ども達が誕生仏に甘茶をかけ、お菓子を受け取った後、新寮長先生から御挨拶をいただき、会は幕を閉じた。

成人男子がいない母子寮の子ども達にとって、私たち浄青会員は、どんな存在であらねばならないのだろうか？僧侶と福祉はどう関わっていかねばならないのだろうか？

さまざまなおもいに後ろ髪をひかれながら、母子寮を後にするのであった。こんな言葉を耳にしながら。

「来年もきてね。必ずだよ！きっとだよ！」

合掌

光明寺十夜法要

斉藤　匡念

十月十四日、大本山光明寺十夜法要早朝、神奈川浄青会員が本山に続々と集まる。私は今回が四度目の参加となる。開ききらない目をこすりながら、手甲、脚絆を身に付け、托鉢姿に変わる若き上人達。自行としての念仏大行進、布教としての街頭伝道はこの十夜法要に因み定着してきた。念佛の声を、法然上人の教えを、鎌倉の街中に少しでも多く法然上人の遺跡を残すようにと努力する青年団。一人でも多くの人の耳に届くようにと大きな声で称える念佛及び街頭伝道と光明寺の引声阿弥陀経。

私は神奈川教区内一僧侶としてこの法灯と生涯受け継いで行くと共に今後の浄青活動に、宗門の諸行事になるべく参加させて頂きたいと思います。

合掌

別時念仏

成田　昌弥

正月二十五日といえば元祖法然上人のなくなられた日。神浄青では本年も別時念仏会を行いました。

午後三時に集合して開白法要に始まり、稗貫公夫上人のご法話をはさんで午後九時の解散まで、ひたすら念仏と礼拝というスケジュール。当然あいだに休憩がはいりましたが、僅かな灯明に照しだされる参加者の黒衣を纏い念仏を唱える姿は、冬の寒さも手伝って、大変厳かで我が身も引き締まる思いがしました。

ひとりで念仏を唱えていると少しの時間でも大変長く感じられますが、皆で唱えると何故か忽ちの内に時は過ぎ、本年も無事に終了する事が出来ました。

合掌

ソフトボール大会報告

瀬高　順教

第十回神浄青ソフトボール大会は九月三十日相模川グラウンドにおいて、五十余名の参加選手により開催されました。

夜来の雨が朝方まで残り、今年もグラウンドコンディションが心配されたが、そこは河川敷。水放けよく所々にぬかるみはあったものの、午後一時にプレーボール。好・珍プレーが続出しながら熱戦が繰り広げられた結果、教区長杯は三浦・中郡連合チームが勝った。

今大会は若手選手の活躍が目覚しく、中堅・ベテラン選手相俟って、一層親睦の輪が広がり、今後の神浄青の発展を期待しながら幕を閉じた。

合掌

神奈川浄青 事務局長より皆さんへ

田辺　裕誠

神奈川浄青事務局。現在の私がつとめさせて頂いている職であります。思い起こせば十数年前、まだ何も分からない学生の時、初めて浄青活動に参加させて頂いた頃を思い出す。

今はOBとなられた諸先輩方が、されていた様々な事、全てが新鮮である反面、若い自分はただただ右往左往しているだけであった。

時はすぎ、学生を卒業した自分はまず組の浄青活動に参加する様になった。その頃の組浄青は常に熱気にあふれ、年端のゆかない私はただ諸先輩についてゆくのが精一杯でありました。しかし、良き諸先輩に恵まれたおかげで、少しづつ浄青とは何かを自分なりに理解してゆく様になって来たのです。

やがて数年後、組の事務局を手伝う頃になると、少々壁に当る事ができてきた。何をかくそう、自分の能力がまだまだ浅いことに気付いたのです。ある程度の文章力、地道な仕事等々。そこで考えたのがとりあえずワープロを覚えてみよう、ということでした。

ワープロを覚えるまでは、やはり試行錯誤の連続でした。夜遅くまでワープロのキーボードと向い合い、一枚の文章を仕上げるまで、夜中をすぎることも少なくありませんでした。しかしワープロを自在にあやつることが出きる様になってくると、仕事量はかなり軽減されてくる様になりました。もちろん、このワープロができる様になれたのは、現在奉職させて頂いている光明寺の先輩のおかげなのです。この方は先見の明がある方で、まだワープロというものが今の様に普及していないころ、私財を以って、光明寺の仕事の為高額な機械を導入されたのです。その機械で操作を教えて頂き、一応人並みの水準まで出きる様になりました。

その様な訳で、現在浄青の仕事にも微力ながら、お手伝いができているのです。

今の神奈川浄青事務局の仕事について述べれば、現会長からお話しを頂いたとき、安易な気持で受けてしまったことは、自分の大いな過ちだと感じている。自分の力を過信しすぎていたきらいもあるが、あまりにも大役すぎて、自分には荷が重かった、と気付いたのは一年もすぎた今日この頃である。

神浄青会員数、百二十数名、OBの諸先輩を含めれば、その数は百五十名を越える大所帯である。

事務局に現在、任されている事務については、幸いにして、会長・両副会長が、事務局長経験者ということである。私が処理に困ったとき、三役の方々に、ご指導を頂くことで、どうにかお役をつとめさせて頂いているのです。

今は、残された期間、微力ながら神浄青に尽力してゆくこと。会長、副会長をはじめ、会長諸師・OBの皆様のお力添えと、助言を頂きつつ北部会長をはじめ、諸師共々、浄青活動に携わっていきたいと思います。最後に、神奈川浄青が益々繁栄することを共々に祈念し、私の所感を閉じさせて頂くことと致します。

合掌

平成4年度 神浄青事業報告

4月25日　花まつり愛のプレゼント
金沢母子寮
4月25日　神浄青定期総会・光明寺
5月25日　第1回　理事会・光明寺
6月1日　浄青神奈川第19号　発行
6月15日〜16日　群馬水上・聚楽
第20回関ブロ総会、研修会
7月3日　光明寺開山忌前清掃奉仕
第2回　理事会・光明寺
7月29日〜31日　教区夏期僧堂手伝
8月27日〜28日　仙台秋保・水戸屋
第22回全浄中央研修会
9月1日　第3回　理事会・光明寺
9月30日　第10回ソフトボール大会
担当―高座組・相模川グランド
10月9日　光明寺十夜前清掃奉仕
第4回　理事会・光明寺
10月14日　十夜法要手伝・街頭伝導
担当―京浜・小田原組
11月10日　大本山増上寺開創六〇〇
年慶賛法要手伝い
11月10日〜11日　東京・ホテル浦島
第10回関ブロソフトボール大会
12月14日　第5回　理事会・光明寺
1月13日　第6回　理事会・光明寺
1月25日　法然上人御忌別時念仏会
2月15日〜20日　海外仏教研修旅行
マレーシア・シンガポール
2月16日〜17日　大本山増上寺
第18回全浄代表者研修会
4月2日　第7回　理事会・光明寺

あの人は今

鎌倉組OB　鳥居真理

説法をする鳥居真理上人

私の友人に鎌倉の竹の寺で有名な禅寺の和尚がいる。いつの頃からか毎年年賀を交換するようになり、今年も私の机の前には彼から貰った暦が掛けてある。それは長さ80センチ程の縦長の下にカレンダーが描かれ上は掛け軸を模して禅語が書かれている。

今は五月、それには涼しげな竹の墨絵と、〝為君葉々起清風〟と墨書されている。

君ガ為ニ葉々清風ヲ起コス

と読むのであろう。

私は数年前のある青年の事を思い出す、それはある日の夕方私が本堂の戸締りをしにいった時の事である。人気のない本堂の前にその青年は立っていた。

私が、「もう閉門します」と云うと「こちらの方ですか」と話しかけてきた。

話を要約すると、彼はテニスプロを目指して上京、力及ばず、せめてこの付近のテニススクールに就職しテニスを続けたいと今日一日歩きまわったが、それもだめであったと云うことであった。たまたま私は以前、友人のすすめでテニスをしていたが正に彼が訪れたのは私の友人の経営するテニススクールであった。

ともかく彼を家に帰るよう説得し、その夜私は友人に電話をした。その結果彼の実力は惨憺たるものであったようである。私たちは、お互い分別臭く彼の青年を評して、そして笑って切った。

数ケ月後その青年は菓子折りを持って寺に訪れた。私はたまたま外出して会うことが出来なかった。そして、それきりのことであった。

今、あの青年はどうしているのだろう、何か別の仕事を見つけ暮しているのだろうか。この五月の風のなかまだ一人で白球をおいかけているのであろうか。ともかく頑張ってほしい。

君ガ為ニ清風ヲ起コス。

と、私は今こんなことをしています。

合掌

編集後記

編集員をお受けして早3年という歳月をただ徒らに過ごしてしまった感があります。編集の仕事というのは実に地味なものです。皆様にご迷惑を承知で原稿を依頼し字数を数え割り振りをし、印刷屋さんに届けるだけ。諸先輩各位の目に触れたなら、「写真満載だね」あるいは「予算の無駄使い」と賛否？両論の冷ややかな視線を感じずにはいられません。が、しかし編集員一同は絶えず努力しています。和合の衆ならぬ鳥合の衆の悪戦苦闘や悲哀、満足感等、いわゆる人生のペーソス（大げさな）を活字に表われない行間に読んでいただけたなら編集長以下5人の肩身も犬のひたいぐらいにはせめてなるのでは？皆様のおかげ様を感謝し、筆を置きたいと思います。

N